

## 「ユビキタス・コンピュータ革命」 —一次世代社会の世界標準—

坂村 健 著

本書は、最近の新聞や雑誌のコンピュータ関係の記事に、「ユビキタス」という言葉が登場したことを受けて、その第一人者である著者が、初心者にもわかりやすく、ユビキタス社会の将来像をまとめたものである。

「ユビキタス」とは、ラテン語からきた英語で、日本語訳は「遍在（広くあちこちにゆきわたっていること・広辞苑）」である。

この言葉は、宗教用語で、キリスト教では「同一の神がどこにでもいる」信仰から「コンピュータがあまねく世界をおおっている」という意味から付けられたネーミングである。

しかし、著者が意図するイメージは、「どこでもコンピュータ」であり、外国の一神教のイメージではなく、多くの日本人が「山」にも「家」にも、「かまど」にも「井戸」にも「八百万の神」を祭ってきたように、「ユビキタス」は、各種機能のマイクロコンピュータがあそこにも、ここにもあり、ネットワークで話し合っているようなシステムで、日本の得意とする分野であると述べている。

著者は、1984年に純国産のコンピュータの開発を目指し、パソコンのようにコンピュータという形をした限られた範囲で用いるだけでなく、産業製品はもとより、民生製品の中に組み込まれて、日常生活の中で使うさまざまな道具・機械を制御するコンピュータの規格として、TRON [The Real-time Operating system Nucleus] (トロン) という「実時間で動くコンピュータのシステム」を開発した。この日本独自のトロンこそ、「どこでもコンピュータ」の考え方にマッチした元祖であり、

そのソフトは独占せず、各企業に公開された。

当時、国は、学校教育にパソコンを導入することで、このトロンを活用し、日本独自のパソコンを開発するために各企業が協力し合っていたが、製品の発表の段階で、アメリカの圧力でそのパソコンは日の目を見ることはなかったのである。

本書の「第1章 ユビキタス・コンピューティングを知るために」では、ユビキタスについて理解し、パソコン万能主義からの脱却やTRONの活用事例が述べられている。「第2章 ユビキタス・コンピューティング社会とセキュリティ」では、コンピュータ犯罪とセキュリティ、ネット犯罪にどう立ち向かうかなどが述べられている。「第3章 オープン・アーキテクチャが拓く未来のネットワーク環境」では、ソフトの公開の意義が述べられている。「第4章 未来のユビキタス・コンピューティング社会に向けて」では、克服すべき課題や目指すべき社会のイメージについて述べられている。

著者は、コンピュータとは何なのかといえ、日本語訳の「電子計算機」というより、中国語訳の「電腦」の方がコンピュータの広がりやを反映していると、大脳に代わるものではなく、小脳が大脳を助けるように、人間の外にあって人間を助ける、「第二の補助脳」であるとしている。

トロンは、アメリカのコンピュータ攻勢で、パソコン分野では遅れをとったが、携帯電話等の分野での普及をみると、その成果は最近締結されたトロンとウィンドウズの協力関係により、今後一層新しいユビキタス・コンピュータ革命の推進に貢献するものと期待できる。

(角川oneテーマ21, p.248, 667円) (山下省蔵)